
しのんでないけどしのんでる

えつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しのんでないけどしのんでる

【Zマーク】

Z0496Z

【作者名】

えつ

【あらすじ】

「安土城に忍びこんで織田信長の私物を一つ盗んでくること。特にフンドシにはボーナスがつきます」それが忍びの里の卒業試練。できるだけ卑怯で姑息な手段を使ってライバルたちをなぎ倒します。時代考証とかいろいろ適当です。HPにも掲載しています。

MISSION1 「城門を突破せよー」

「安土城に忍びこんで信長の私物を一つ盗んでくる」と。特にファン
ドシにはボーナスがつきます」

これを忍びの里の卒業試験とする。

早朝の青空の下。

教師の言葉に卒業生たちはざわめきたつた。

「ボーナスって現金ですか？」

「金ではありませんがいずれ大金がもらえるようになります」

「どうやって信長の私物だと鑑定するんですか？」

「企業秘密ですが、できるだけ自分たちで証拠をそろえるようにして
たほうが卒業後の就職率がアップするかもしません」

「バナナはあやつに入りますか？」

「土でも食つてろ」

「信長の物であればなんでもいいんですか？」

「なんでもいいです。ただし、入手困難なものほど高得点のはい
うまでもありません。なお、殺されようが捕まろうがこちらは一切
責任をとらないし助けにも行かないでのそのつもりで。できなかつ
たら留年です。特におめおめと手ぶらで帰ってきたものは公開処刑
します」

「ヒイイ……！」

「鬼！」

「人でなし！」

悪魔とクラスメイトたちの会話を聞きながら、小太郎はぼうっと
つったつていた。

おそらく、ボーナスは大国への就職斡旋だろ。平凡な出来である
と自負する小太郎は、高望みする気がない。田舎の小国か小金も
ちにでもつかえられればそれでいい。したがつてフンドシには手を
出さず、手堅く信長の将棋のコマでも狙うのがいいだろ。そうし

よ。

一人侵入プランを立てていたら、

「欠席者は一人だけなのにだれかたりないと思つたら、こんな所にいたんですか？」

教師がこちらにやつてきた。

「出欠なら、さつき名前を呼ばれたときに返事したはずですが」

「あなたの声、特徴がなさすぎて印象に残らないんですよ。顔も名前も平凡だし、体型も中肉中背で性格もありきたりだからほんと記憶に残らなくて」

「いじめでしょうか？」

「いいえ、褒めてます。忍者は田立つてはいけない。あなたのそのありえない存在感のなさは貴重なものです。きっと優れた忍になれる事でしょう。期待していますよ」

「先生……」

優しいこともいえたんですね。初めて知りました。

「で、名前なんでしたっけ？」

「小太郎です」

忍びの里を出て一時間ほど。

安土城に到着し、小太郎は近くの木の上に身をひそめた。

基本的には黒い忍び装束で夜間に活動するのだが、今は昼間なのでまつ白な忍び装束に身を包んでいる。草や土で適度に汚れているのが目立たなくていい感じ。そのかいあつてか頭に鳥の巣を構築されつつあつた。

目の前には堅牢な城がそびえ立つている。

見はりの数も多く、侵入するだけで骨が折れそうだ。どうしたものかと頭をひねっていたら、武士が門へ近づいていった。

「また！ 見ない顔だな。名を名乗れ！」

左右に立つ二人の門番が槍をクロスさせ、道をふさぐ。

「拙者、本田より城に仕官する」とこなつた小早川一衛門でござる」

「ならん！ 今日はだれも通すなと殿からのお達しだ！ 後田出な

おせ!

ちいっ、バレたか！」

なんと、クラスメイトが武士に変装していらっしゃい。

武士はばつと服をぬぐと元の忍び装束にもどり、ぬいだ服を門番たちに投げつけて城内へ走った。

「侵入者だ！ あえ、あえーっ！」

「ずびどびどびどびどび、」という地響きとともに城内から大量の武士が駆けつけ、クラスメイトを追つていった。後には盛大な砂ぼこりと、元通りいざまいを正す門番たちが残る。まだ入り口なのに、ここはなかなかの難所のようだ。

壁をよじ登つて侵入したほうが楽かもしれないな、と固唾を飲んでいたら、

「あれ、小太郎くん？」

いきなり下から声をかけられ、とつさに木から飛びおりて相手を羽交い絞めにし、小太刀をつきつけてしまった。が、それは素早く外され、あつという間に背負い投げをくらう。

地面にたたきつけられてのびていたら、笑いながら顔をのぞきこまれる。

「ひどいなあ。ちゃんと名前を呼んだのに、
すずやかな切れ長の瞳。 攻撃するなんて」

さりとてなびく黒髪を後ろにまとめ、頭巾の中に押しこんでいた。細い体は黒い忍び装束に包まれていた。

「あ、すまない。半蔵だつたのか」

いかつい名前だが、だれもがふり返るほど華やかな美少女だ。

「こちらもクラスメイトで、嵐は同じ14歳。小太郎の気配を感じとれるレアな友人である。でもって成績も非常に優秀である。昼間で

黒い忍び装束は目立つと思うのだが、「白なんかダサイからやだ」とのことでのことで、彼女は白を着たことがない。そういえば、同じ意見なのか、はたまたわざわざ白を買つのが面倒なのかはわからないが他のクラスメイトも白は着ない。便利なのに。

「正面から侵入するのは難しそうだぞ」

「どうして？」

さつきの光景を話すと、半蔵は整った顔でさわやかに笑った。

「小太郎くんなら大丈夫だよ。ほら、お先にどうぞ！」

んなわけあるか。忍び装束で城門へ進んだりしたらたき出されるに決まっている。

抵抗したが、城門までどーんと思いきりつり飛ばされてしまった。

「く……っ！」

こうなつたら力技で突破するしかない。

小太刀をかまえ、違和感に気づく。

忍び装束のうさん臭い少年が目の前に立っているといつのに、門番たちがまつたく警戒していないので。

「え？」

つい声を出すと、門番の一人がこちらを……いや、こちらを通りこして背後にあるもう一人の門番に視線をむけた。

「今なにかいつたか？」

「いや、なにも。今日はいそがしくなりそうだな」

「まったくだ」

こいつら、俺に気づいてない。

人に話しかけても無視されたり、手裏剣が自分の分だけ支給されていなかつたり、自分の机を指さされ、「この席の人つていつくるの？」などと目の前で聞かれたことはあつたが、まさかこれほどまでとは思わなかつた。

「……」

にわかに精神的ダメージをくらいつつ、小太郎は余裕で城門を突破した。

バレぬなら、バレるまでやつちまえホトトギス。

それから小太郎は怒涛の開き直りを見せた。

城内でフラメンコを踊りながら女中とすれ違い、見回りする侍の頭からカツラを奪つて床に置いてみたり、障子にでかでかと墨で落書きしたりした。

すべてスルーされた。

五分間ほど廊下のまん中で体育座りをしてすすり泣いたが、だれもなぐさめてくれないどころか侍女に蹴られ、「あら、ネコでもいたかしら?」とかつぶやかれてやめた。今は廊下の端にいる。

「なにをしてるんだい君は

いつから見ていたのか、天井の板を外して半蔵が逆さまの顔をのぞかせる。

「半蔵。俺は裸で歩いてもだれにも騒がれないような気がしてきた」「つらやましいよ。それより、君に頼みがある」

どうやら忍びの里の卒業生が侵入してくるとバレてているようで、信長の私物が一箇所に集められ、厳重に警備されている。

半蔵がその警備網を突破するのはたやすいが、問題は他のクラスメイトたちだ。城内にうじやうじやひそんでいる気配があるが、姿が見えない。みはりを倒している間に獲物を横ぢりされたり、倒した瞬間になだれこんできて獲物争奪戦になるのが心配らしい。

「もちろん勝つ自信はあるけど、卒業生は40人いるからね。何個かとり逃げされる危険がある」

「試験は1個もって帰ればいいんだろう? 別に少しくらいとられても」

「小太郎くんは欲がないねえ。私はフンドシ狙いなんだ。アレをとられちゃ困る……そういうわけで、その部屋を教えてあげるからフンドシとつてきてくれない?」

「別にかまわんが」

二つ返事でうなずいて、その場所へむかった。

その部屋は入り口が三つもあり、どこにも見はりが一人ずつ立っていたが小太郎は彼らを素通りして普通に中へ入った。中には信長の私物がどつさりと山積みにされ、二人の侍が口論している。

「えい、勤務中に菓子を食うんじゃない！」

一人はクマ男、という感じの筋肉ダルマ。

相撲とりのような巨体で、素手だけで十分な攻撃力をもつていうだ。

「えー、意味わかんないんスけど。まだだれも侵入者きてないし、まつだけなら菓子食いながらでも問題ないじゃないですかー」

もう一人は二十歳そこそく。背は高いが優男で、長い髪を一つに結わえている。この城にいる武士はみんな正服であるかみしもと長着を着ているのだが、この男だけは普段着のままだった。

「ばかもん！ 集中力が削がれるだろ？ が！ だいいち甘い菓子など……せめて塩にぎりにせんか！」

「ジジイの偏見うぜー」

優男がクマの口に和菓子をつっこむ。

小太郎はその横をすりぬけ、ガサゴソとフンドシを探していた。だが、ない。

どこにも見当たらない。困って天井を見上げると、小声で半蔵がたずねた。

「どうしたの？」

「フンドシがない。ボーナス特典だし、違う部屋にあるのかかもしれない」

しかたなく茶器を一つもつて部屋を出ようとした、そのとき。

「へつくし！」

うつかりくしゃみが出てしまった。

「うわ、曲者！」

「あえ、あえいー！ 賊がきよつたぞー！」

のんきに甘党と辛党について議論をかわしていた侍一人が小太郎

に気づき、抜刀して襲いかかってくる。

気づいてもらえた嬉しさに涙ぐみそうになつて、つい反応が遅れてしまつた。とつさに後方へ飛んだものの、右手に刃が届きそうだ。あわや血を見るかと思ったが、とつぜん侍たちがぐにやりとへたりこんで失神した。

「氣をつけてね。高レベルの者ほど君の氣配を察知しやすいんだから」

半蔵が吹き矢で二人を仕留めたらしく。

「賊はどこだー！？」

「曲者だと！？」

「命知らずな！」

三つの入口でそれぞれみはりをしていた侍たちが六人、同時に戸を開けて押し入つてくる。

半蔵の吹き矢で一人倒し、残り四人は小太郎がみね打ちで氣絶させた。

ひらりと天井裏からおりて吹き矢をしまうと、信長の茶器を一つ受けとつて彼女はいつた。

「さあ行こう、信長を探しに」

「俺も君も信長の私物を一つずつ手に入れたことだし、信長を探す必要は……」

「なにいつてんの、これは保険にすぎないよ。私の狙いはフンドシ。そしてフンドシがここにないということは、きっと信長自身が装備しているに違いないよ」

フンドシ連呼する美少女ってなんかヤダなあ。

しかもぬぎたてホカホカを狙つているというのだから、「おまえは一体どこへ行こうとしているんだ」と聞いたくなつてしまう。出世と大金に目がくらんでいるのかもしれないが、目を覚ませといい。いえない。

「あれ？ その顔、もしかして手伝ってくれないつもりなの小太郎くん。たつた今助けてあげたのに」

大して身長は変わらないのに、わざと少しかがんで上目づかいで顔を近づけてくる。うるんだ瞳は愛らしいが、あいにく小太郎は長いつき合いで免疫ができている。

「忍び同士で色じかけが効くか

「おや残念」

けろつとして半蔵がはなれる。

「だが借りは返すよ。友達だしな」

「そこなくちゃ」

半蔵は一つこりと満足そうに笑つて再び天井裏へひっこんだ。ほぼ同時に、外にひそんでいた大量のクラスメイト達が室内へ押しよせてくる。彼らによつて信長の私物争奪戦が繰り広げられたが、小太郎はやはりだれにも気づかれず、無傷でその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0496z/>

しのんでないけどしのんでる

2011年12月1日22時52分発行